

北川泰三氏の問いに答えて

——地域社会を共に育てる条件——

増田 勝

はじめに

拙稿「これからの地域社会像を素描する」に対して、北川泰三氏から幾つかの重要な問題提起をいただいた。いずれも地域社会のあり方を考えるうえで本質的な問いであり、それぞれに掘り下げた検討が必要となる。ここでは、これらの問いに対して、拙稿で示した考え方を踏まえながら、基本的な見解を整理したい。

1. 農山村と都市のコモン

農山村と都市では、地域資源や人々の関係、生活様式、活動の形成過程に違いがある。

拙稿では、コモンを、共有される物や空間そのものだけでなく、人々が関わり、共有・参加・協働を通して、人・場・活動・関係を共に育てていくという動的な側面も含めて捉えている。

このような視点に立てば、農山村と都市のコモンは、地域の歴史や文化、生活・生産のあり方、社会関係などを背景として、それぞれ異なる形で形成されてきたものと考えられる。

例えば、農山村では、農地や森林、水などの資源を共同で利用・管理する営みを通して、地域の関係や仕組みが育まれてきた。一方、都市では、公園や公共施設、空き家などの身近な空間を活用し、人々の交流や共同活動を通して、新たなコモンが生まれることがある。

このように、コモンの具体的な姿や形成の背景は異なるものの、人々が関わり、場や活動、関係を共に育てるという基本的な性格は、農山村にも都市にも共通している。

2. 三領域循環の共通性と多様な展開

こうした地域によるコモンの違いを踏まえても、生活の基盤づくり、経済の循環づくり、社会関係づくりという三領域が相互に関わりながら地域を育てるという基本的な構造には共通性がある。ただし、その形成の起点や展開の道筋は一樣ではない。

例えば、西日本のある地方都市では、市町村合併や人口減少、高齢化を背景として、従来の集落単位では対応が難しくなった生活課題に取り組むため、住民による地域運営組織が形成され、地域の交流施設が活動拠点となった。こうした組織や場を通して住民や団体の関係が育まれ、生活支援、防災、福祉などの活動へと展開している。社会関係づくりを起点として、生活の基盤づくりへと広がった事例と捉えられる（社会関係づくりを起点とする事例）。

一方、関西地方の大規模ニュータウンでは、住民の高齢化や住宅・都市施設の老朽化に対応して、住宅の建替えや施設の更新、歩行環境の改善、交流空間の整備など、生活基盤の再編が進められてきた。これと並行して、身近な生活空間を活用した住民の交流や地域活動も展開しており、生活基盤の再編と社会関係づくりが相互に関わりながら進んできたと捉えられる（生活の基盤づくりを起点とする事例）。

また、中国地方のある山村では、森林資源の持続的な管理と木材の加工・商品化を結び付け、地域に新たな仕事や事業を生み出してきた。こうした経済活動は、新たな人材や事業者の参入を促し、地域の関係づくりや、住まいの維持管理など生活に関わる活動にも広がっている（経済の

循環づくりを起点とする事例)。

このように、三領域の形成の起点や展開の道筋は地域によって異なるが、各領域の実践が相互に関わりながら地域を育てるという基本的な構造には共通性が見られる。そして、こうした実践を生み出す基盤となるのが、人々の関わりから育まれるコモンである。一方、生活の基盤づくり、経済の循環づくり、社会関係づくりの実践は、新たな人々の関わりや活動の場を生み、コモンをさらに豊かにしていく。すなわち、コモンが三領域循環を育み、三領域循環が新たなコモンを育てるという相互生成の関係として捉えることが、農山村と都市の地域社会づくりを考えるうえで重要である。

3. 公共空間とコモン、地域マネジメントの成立条件

都市の公園や広場、公共施設などは、人々が利用する公共空間であるが、それ自体が直ちにコモンとなるわけではない。そこに人々が関わり、交流や共同活動を通して場を共に活かし、育てていく関係が生まれることによって、コモンとしての性格を持つようになる。したがって、コモンは公共空間だけに限らず、空き家や空き店舗、民間施設などにも形成され得る。重要なのは、空間の所有形態ではなく、人々がどのように関わり、共に活用し、育てているかという点である。

一方、こうして生まれたコモンを持続的に育てていくためには、人々の自発的な関わりだけでなく、活動を継続させる仕組みが必要となる。その基本となるのは、地域の課題や目標を共有すること、多様な主体が対話し協働できる関係を育むこと、活動を担う人材や場所、資金などの資源を少しずつ確保し、活かしていくこと。さらに、活動や事業を相互につなぎ、次の展開へと結び付けることである。こうした働きを担うのが地域マネジメントである。

その担い手には、住民組織、NPO、地域の事業者、行政など多様な主体が考えられる。協同組合等も、人々の協働によって地域に必要な仕事やサービスを生み出し、継続していく仕組みとしての役割を果たし得る。ただし、地域マネジメントは特定の組織が一元的に担うものとは限らず、多様な主体が役割を分担し、連携することによっても成り立つ。

このように、コモンを持続的に育てていくためには、人々の関わりを活動へとつなぎ、その活動を継続するための関係や仕組みを育むことが重要である。地域マネジメントは、こうした実践の積み重ねを通して、その担い手や運営の仕組み自体を育みながら、コモンと三領域循環の相互生成を促し、持続させていく働きとして捉えることができる。

4. 地域社会とコミュニティ

地域社会とコミュニティは、人々が関わり合い、共に暮らしを育むという点で大きく重なる概念である。ただし、必ずしも同義ではない。コミュニティは一般に、人々のつながりや共同性に重点を置いて用いられることが多い。一方、地域社会は、そうした人々の関係に加え、生活環境や経済活動、地域の組織や制度などを含む、地域の暮らし全体を捉える概念として用いることができる。

北川氏が紹介された大森彌氏の「共に重荷を担い合う諸活動」というコミュニティの捉え方は、人々のつながりだけでなく、暮らしを共に担う実践を重視するものである。この点は、本稿で示した「関わる・認める・支え合う」という地域社会の原理とも通じており、両者が重なり合う重要な部分である。

一方、本稿で「地域社会」という言葉を用いたのは、こうした人々の関係や共同的な営みを基礎としながら、さらに生活の基盤づくり、経済の循環づくり、社会関係づくりを一体として捉え、それらを人々が共に育てていく「社会の姿」として描こうとしたためである。

おわりに

北川氏からいただいた問いは、地域社会を共に育てるという考え方を、農山村と都市の実態に即して、さらに具体的に考える機会となった。とりわけ、コモンと三領域循環がどのように形成され、相互に育まれていくのか、また、その過程に地域マネジメントがどう関わるのかは、今後さらに検討を深めるべき課題である。

現在進めている地域の事例研究などを通して、これらの形成と展開の過程を明らかにしていきたい。貴重な問題提起をいただいた北川氏に感謝申し上げたい。